

平成26年度 新発田市遺跡出土品展
新指定の山草荷遺跡出土弥生土器



Photo by T.Ogawa

平成27年2月21日[土]～3月1日[日]
新発田市立図書館 坪川記念室

新発田市教育委員会

はじめに

このたび、平成26年1月に市の指定文化財（有形文化財 考古資料）となった山草荷（やまそうか）遺跡の弥生土器を、市民の皆様にご覧いただき、先人の生み出した優れた造形美と、悠久の大地に残された歴史に想いを寄せていただきたく存じます。

なお、今回の展示は、所有者の大木家の御理解によるものです。ここに深く感謝申し上げます。

山草荷遺跡の発見と文化財指定

山草荷遺跡は、加治川右岸の下流、海岸線から約5km内陸の砂丘列上にあります。遺跡は昭和8年に発見され、稲荷岡在住の郷土史家 おおき きんぺい 大木金平はここで発見した土器に注目し、当時、東京大学人類学教室の やはたいちろう 八幡一郎を招いて見解を求めました。八幡は、土器のかたちや文様を分類することで、土器の地域差や年代について研究していた考古学者です。

八幡は、この土器を、当時まだはっきり分からなかった新潟地方の弥生土器だと指摘するとともに、類似例の発見に期待を寄せました。これを受けて、大木は私費を投じて発掘を行い、その成果を学術誌『中部考古学会彙報』を通して学界に問いかけました。その結果、山草荷遺跡は広く注目されるようになり、昭和13年に開催された中部考古学会新潟大会で、遺跡の現地調査、大木が集めた資料の見学会が大々的に催されました。また、同じ頃に進められていた弥生土器の全国集成でも、新潟を代表する資料として取り上げられました。

山草荷遺跡は、新潟県内で初めて発掘調査が実施された弥生時代の遺跡です。特徴的な土器群は、当時の学界に注目されて弥生土器研究に大きな影響を与えたばかりでなく、現在でも資料的に高く評価されています。これらのことによって、市指定文化財となりました。



山草荷遺跡を紹介した大木金平
（写真提供：新発田市立米子小学校）



山草荷遺跡を調査する八幡一郎
（撮影者：中村孝三郎 中村1995）

小型の壺形土器



甕形土器



器台形土器（半分欠損）



蓋形土器



山草荷式土器の特徴

山草荷遺跡の弥生土器は、昭和30年代に「山草荷式土器」と名付けられました。大型の壺形土器（表紙・裏表紙）・小型の壺形土器・甕形土器・高杯形土器・器台形土器・蓋形土器があります。

大型の壺形土器には、口縁から胴部の上半に2本ひと組の細い竹やへら状の工具を用い、並行線で渦巻き文・円弧文・菱形文を描き、胴部の下半は縄文を施しています。赤く塗られたものもあります。甕形土器は、反り返った口縁部の内側に櫛歯状の工具で羽状文を、胴部の上半には連続する波状文・山形文や菱形文が施されています。器台形土器は赤く塗られ、脚部には透かしの文様が付けられています。

近年の研究で、大型壺形土器は福島県会津地方の川原町口式、甕形土器の口縁部は北陸地方の小松式、胴部は秋田県の宇津ノ台式の文様の特徴と共通し、長野県北部の栗林式の壺形土器も出土していることが明らかとなりました（石川2004・2012）。



Photo by T.Ogawa

引用参考文献

- 石川日出志 2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域関係」
『駿台史学』第120号 駿台史学会
石川日出志 2012「弥生時代中期の男鹿半島と新潟平野の遺跡群」『古代学
研究所紀要』第17号 古代学研究会
中部考古学会 1980『中部考古学会彙報全』長野県考古学会創立20周年記
念復刻 長野県考古学会
中村孝三郎 1995『越後の発掘遺跡-想い出の史蹟・思い出の人々-』長岡市
史双書No.30 長岡市

平成26年度 新発田市遺跡出土品展

「新指定の山草荷遺跡出土弥生土器」

編集・発行：新発田市教育委員会

〒959-2323

新潟県新発田市乙次281番地2

TEL:0254-22-9534

発行日：平成27年2月21日